

# 本岐道平の銅版画「神経血絡開現図」とエウスタキ解剖書

菅野陽

はじめに

日本の銅版画製作は時代によって版の作り方が異なっていた。十六世紀の中ば伝来したキリスト教の影響の下で教えられたのは直刻の彫刻銅版画Ⅱエングレーヴィングの製版技法であったが、その方法が行われたのは十六世紀も終りの九〇年代と次の世紀の十年前後までの期間であった。しかしその技法は禁教鎖国政策の下で消滅してしまふ。

次に十八世紀の八〇年代に、蘭書を翻読して腐蝕銅版画Ⅱエッチングが先ず江戸で創製され、中京、京摂の地方でも作られるように拡がっていった。それらの中で江戸系が最も熱心に西洋画の遠近法、陰影法を取り入れた日本、ことに江戸の風物を描くことに努めた。その洋風画表現は木版画の浮世絵の世界にも影響を及ぼした。しかしその江戸系銅版画は「天保（一八三〇）から幕末にかけて、甚だしく衰え、辛うじてその余喘を保つに過ぎぬかのようにであった。」と西村貞著『日本銅版画志』に記述されている。そしてその要因は「天保十年（一八三九）己亥七月渋川六歳の蘭学、蘭書取締に關する意見書など」の当時の洋学に対する反動運動が銅版画やその作者を圧迫したのではないだろうか、としている。

本岐道平の銅版画「神経血絡開現図」とエウスタキ解剖書

本稿で述べる本岐道平は、その弾圧に巻き込まれ、押込おしこみの憂き目に遭った。咎められたのは、洋式銃の修理、鑄造したことにあつた。彼は理化学に詳しく、大槻如電が道平を「隠れたる電気学者」と評したが、平賀源内伝来エレキテルを公開したりもした。当時華山の蘭学的知見をしたって集まった蘭学者たちと交際があり、蛮社の獄に連坐したとして鳥井耀藏によって渡辺華山、高野長英らと共に天保十年五月に告発拘置され、取調べられた。従つて彼に関する記述は蛮社の獄関係書の中に見ることができるが、彼の銅版画製作を取りあげたものは前引西村貞氏、池長孟氏のほかには見当らない。

しかし本岐道平の銅版画十点が神戸市立博物館に所蔵され、現存する。その内に扉画ともいえる一枚に「神経血絡開現図」と表題の右から横書の刻記があり、その下辺に Motoki mihhei kole wohoi と刻記してある。その銅版画についての記述は故池長孟著『南蛮美術総目録』（昭和三十年五月・市立神戸美術館発行二六五ページ）に載っている。他の九枚は人体の神経全図と正面と背面から観た人体の各部分に至る神経や、動、静脈の状態を腐蝕銅版画に製作し、主要部分を色彩別に塗り分けた人体解剖図である。

昭和六十年それらの銅版画を撮影して検討した結果、原図は十六世紀のイタリアの医師、解剖学者バルトロメオ・エウスタキ Bartholomeo Eustachi

挿図1 本岐道平 神経血絡開現図 扉

挿図2 同 扉下辺部分

(ca.1500-1574)の遺著の解剖書中の人体解剖図版を模刻したことを確定することができた。エウスタキ(時にはエウスタキオ Eustachioとも呼ばれ、江戸時代の日本ではエウスタキオのラテン語 Eustachius を漢字をあてた欧私太機都私あるいは欧私荅鳩斯と書かれた)の原図は一五五二年に腐蝕製作されていたが、その全図版は一七二四年に出版された。その解剖書は高く評価され、千八百年までにラテン語版をはじめ、英語版、オランダ語版、ドイツ語版に訳された諸版は十種類を数えることができる。

その内のオランダ語版は十九世紀前半、日本の翻訳解剖書に翻(抄)訳されたり、図版の一部が模写あるいは模刻された。本岐道平の模刻銅版画もその一例といえる。

本岐道平の銅版画十点は既述のように神戸市立博物館が所蔵している。岡村千曳著『紅毛文化史話』では寛政年間の洋学者相撲見立番附や同芝居見立番附に入っている備中松山藩の儒臣松原右仲を「忘れられた銅版画家松原右仲」として取上げられた。右仲は松平定信の『退閑雑記』に書かれているが、遺作としては「万国輿地全図」の東、西両半球の世界地図が現存する。それに倣って「忘れられた銅版画家本岐道平」の前記十点の人体解剖図版(図版 X・a・b・挿図1・5・7・9・11・13・15・17)を評価記述したい。

また併せて十九世紀前半日本で引用したエウスタキの解剖書の初版ができるまでの状態や、原書の版が改訂版から蘭語版ができ、日本の医学解剖書等に活用された状態など明らかにできたことを紹介記述する。

なお本岐道平(もときみちへい)は本木道平あるいは元木道平とも書かれたものがあるが、同時代の告発状に本岐道平と書いてあり、Mitheiと自ら刻記しているので、どうへいではなく、みちへいと読む方がよいと思う。

### 一、本岐道平と銅版画「神経血絡開現図」

本岐道平について多少でもふれた同時代の記録としては、鳥居耀蔵が作成した無人島渡航計画者一味十八人を老中水野忠邦に上申した告発状、水野が告発された人々について直属の隠密吏に命じた再調査の探索復命書、幕府の申渡書(判決文)<sup>2)</sup>が幕府方にある。被告側からは渡辺登の口書<sup>3)</sup>が出ている。また華山の高弟であった椿椿山の天保十年五月十五日から六月十七日にわたる麴町一件目録と題した記録がある。それは被告渡辺登を支援する立場の人による支援内容を伝えるものである。また『天保雑記』が内閣文庫にある。なお天保十年に四十歳だった兵学者清水礫洲の随筆『ありやなしや』に蛮社の獄について当時の側面からふれた詳しい記述がある。しかし本岐道平は十

八人の一人であるので、彼に関する記述は少ない。

本岐道平の生没年については、呉秀三著『シーボルト先生』3その生涯及功業には本木道平（寛政六年一七九四―天保十年一八三九）とある。大槻如電の『新撰洋学年表』の天保六年の項で、本木道平（四二）とある。同じ筆者の大正二年二月発行の「通信協会雑誌」の「是れも亦隠れ本木道平」では、獄中伝染した湿瘡のため苦痛して幾程もなく死してけり。此年、（すなわち事件の落着いた天保十年か）翌年か月日も未祥、とある。椿山の麴町一件目録中の五月十八日、廿三日の項に道平の年齢を四十六とした記録が二回ある。なお『天保雜記』の五月廿三日の項にも四十六と記載してある。四十六を満年齢ではなく、数え年とすれば『シーボルト先生』の記述が妥当と考えられる。

道平の経歴の中、最も活躍したと思われる天保期の後半生は、告発状や申渡書の幕府側の記録である程度判るのでそれらを写してみる。告発状では、

遠山半左衛門組

御徒

本岐栄作養父

隠居 本岐道平

此者一体蘭学を好ミ、種々之細工物を工夫致し、近来専ドンドルと唱候小筒を製作致候、去年三月中御代官羽倉外記伊豆七島巡見之節、用人致し罷越候ものにて、猶又来子年外記手附手代七島より無人島へ可差遣目論見二付、其節は案内ニ罷越候旨申繕、同志之もの申合、漂流ニ事寄せ呂宋・サントーイツ・アメリカ国辺迄漂着可致心組之由。

次に道平への申渡書だが、一件は天保十年十二月に落着し、十八日申渡が行われた。

本岐道平の銅版画「神経血絡開現図」とエウスタキ解剖書

遠山半左衛門組御徒

栄作父

本岐道平

其方儀先年御徒相勤御暇相成候後、銅物細工致し、阿蘭陀持渡候トンドルヒユスと、申小筒の具合直し被相頼候を手掛にて右仕方見覚候とて新規に仕立可申と存じ、真鍮にて小筒之下地を鑄立拵掛り、いまだ出来不致候得共其右体異類之鉄砲所持主も不相糺、工合直し遣し、又可売払と新規に鑄立候段、不埒に付所持之鉄砲取上げ、押込申付ル。

道平は五月十四日、一件御不審の一人として召捕られ、家宅搜索をされて前記の申渡書にある通り所持していた鉄砲類は押収された。それに関する記録としては『天保雜記』に次のようにある。

天保十亥年五月十四日

遠山半左衛門組御徒

栄作父

本岐道平

右途中にて召捕られ、直に宅に有之鉄砲類残らず御取上ケ相成、其外四人召捕られ候由、

とあり、続いて同月廿三日の記録がある。そこには華山ら五人挙げてあるが、道平もその中に入っている。「一ト通尋の上改揚屋に遣す」とある。それは「大草安房守御役宅にて佐々木三蔵立会安房守申渡候」、とあって五月廿二日となっている。次には十月十六日の項の三番目に、「前同所同組御頭に預ケ遣す 遠山半左衛門組御徒 栄作父 本岐道平」と並記され、「右、大草安房守御役宅にて佐々木三蔵立会安房守申渡候」とある。その後の記録は前述した十二月十八日申渡が記載してある。

椿山の「麴町一件書類」の五月十六日に、是は立原より書をかりて写す、

とある十八人の姓名の内の一であり、十八日の記録では、十五日御呼出吟味の上揚屋入、が四人挙げてある中の一人として載っている。廿三日には、

「昨廿二日被仰渡書付に一遍尋之上改揚屋入」は崋山渡辺登はじめ五人いる

中に道平も入っている。同日の最後の行に「一、三味線堀松平内紀殿

長英之門人也鉄砲の修覆を道平へ頼みよし」とある。なお十六日の夕、『あり

やなしや』の著者清水礫洲方へ御番士多羅尾七郎三郎本所三が来て、「蘭学家

本岐道平下谷御徒隠居へ蘭製の鉄砲類頼み置たるに、公辺より御沙汰として取揚られ

たりと、昨日拙者留守中に道平来り言置たりとの事は、如何なる次第にや」

と問うので、礫洲の父は「崋山の事を告げ、定て其等より起りしならん」と

話すと多羅尾が驚いたことを述べている。さらに十五日夜本岐道平召捕ら

れ、鉄砲も取揚げられた事は早くに椿山が知っていたことも記述してある。

『天保雜記』と日付の点で異っているが、以上によっても道平は松平内記に

は鉄砲の修繕を頼まれていたことや多羅尾七郎三郎からオランダ製の鉄砲類

(小銃や短銃などを指しているのか、挺数などは不明だが)を頼まれていたこと

が判る。

なお『天保雜記』の五月廿六日に、松平内記が先祖から所持の鉄砲二十三

挺を道平に修繕のため預けてあったが、道平召取の際町奉行大草安房守が取

上げたと、栄作から言ってきた。今朝大草安房守方から御調べの上返事する

という事なので、この旨を届け出たという記録があり、右鉄砲は松平内記方

へ戻されたとある。

崋山の口書の中で道平について述べた部分が次のようにある。

遠山半左衛門様御徒士栄作父本岐道平は、鉄砲細工致し、以前より懇意に有  
之、七八年以前と覚え候、ドルールヒユスと唱ふる小筒を持参候間、一覽の上

差戻し候儀に有之。

従て道平は渡辺崋山と昵懇にしていたし、鉄砲などを見せに出向いたりした様子が記述されている。しかし崋山が道平を画の描ける人物としてつきあっていたかどうかについては全く判らない。

『ありやなしや』に、六月十四日吟味あり。道平は大病、とある。そして十二月十日大草安房守が急死し、同十八日には、南町奉行筒井伊賀守役宅に於て、全く落着、とある。本岐道平は揚屋入りさせられた五月十四日から一応元気でいたのは一カ月足らずで、六月十四日に大病になっていたことが判るが、前述したように大槻如電の記事には、押込(自宅禁固)の申渡後苦しみの中に死んだものとされている。また同『ありやなしや』の記事中に、道平が幕末の剣客として名高い斎藤弥九郎と懇意であったことが書かれている。

「蘭学を好み」といわれた道平が何年頃から蘭学に関心を抱くようになり、蘭学者たちの集まりに出るようになったか明かではない。申渡書では「御徒相勤御暇相成候後」は、とあり、養子栄作を迎え隠居の身となつてから、生来の優秀な工夫力と手技の器用さを生かしたが、その基礎知識は蘭学者たちとの交流から得ていたとされる。大槻如電の『新撰洋学年表』では「小関三英、高野長英等について理化学の則を研究し」とあり、別の前掲「通信協会」雑誌記事には「夙く小関三栄に従学し」と如電は書いている。御徒であった頃からすでに関心を持ち学び始め、和蘭薬品の製練法を修得し、電気の研究も其れから出たものであると如電は記し、その後退身してから製薬業を専業にし、浅草三筋町の北隅の袋町に居住していた。と同記事は続く。

平賀源内伝来エレキテルの看板のもとに、電気発光の観世物を浅草蔵前通りに本岐道平が出したのは天保の初年とあるから道平の三十七歳の年である。摩擦エレキで種々の作用を示してその功績を説いたというから正に科学

の実用的機能を説明したはずであったが、一般の見物人は大勢集まってもその珍らしさに驚くばかりで、魔法だ妖術だと騒がしかった。町方同心が取締のため道平の自宅に詰問に向いたが、道平の説明する電気の道理を理解する能力などなかったので、道平は火打石をとって火打鎌に打ち当てて燧火を出して、これも魔法か妖術かといって同心を追い帰した。しかしその観世物は禁じられ、結局数日間の展示に終わったという。

如電はその記事の終わりに、源内を初代とすれば、二代目はその四十年後の大阪の橋本宗吉で、その二十年後に出た本岐道平を三代目とみ、四代目はさらに二十年後の佐久間象山と電気史に補入したい、と書いた。また道平の多能多才さが雷管発射の短銃の補繕を可能にし、天保十年の無人島開墾の疑獄事件に連坐してその身を亡ぼした、と記述している。しかしその中に銅版画製作に関しては何も述べられていない。

道平と多年昵懇であった華山の口書の中でも道平の鉄砲に関する執着振りを語ってはいるが、銅版画製作には何もふれていない。しかし申渡書の中で、「御暇相成候後は銅物細工致し」とあるのは吟味の過程で道平が述べた細工の中に銅版腐蝕法を会得していたことも入っていたと考えられる。和蘭薬品の製練法を修める課程で、銅版腐蝕の工程を学んだと推考できる。前引如電の記事中に、道平が硝石精を製した鉄鍋で温飴を煮て食べ大下痢をおこし、夫婦ともども床の中で苦しんでいた。ちょうどそこへ小関三英が訪ねて来てその様子に大へん驚き、早速手当して直ったということが出ている。硝石精の語は橋本宗吉の『三法方典』（享和二年一八〇二）に出たのが早い方だった。それは近代的意義において最も早く薬品製造法を記述したものとされている。その後にも化学薬品の製法等を書いた舎密学（化学）一名分離術、分析学を論述した著作が出ている。道平が硝石精を煮た、ということは銅版

腐蝕液（ステレキワートル強水）を作ろうとしていたのではないかと推考することもできよう。道平の和蘭薬品製練法の研究と彼の銅版腐蝕をむすび付ける所以である。

道平の多芸、器用さは製薬業を専業とするほどであったし、エレキテルの研究より以前に遡る頃であったかも知れない。余りに次々と研究工夫の結果が蘭製の雷管発射装置で終局を迎え、劇的な騒動にまき込まれて終わったため、初期の研究成果の一つである銅版画製作を数年も交わっていた人も忘れていたのではないだろうか。厳然と現存する「神経血絡開現図」は彼の蘭学によせる関心が蘭書の閲覧によって模刻を実行させ、医学を学んだことなどないと思われる道平が原蘭書に十分施されていない主要部分を色彩見本をつけて塗り分けているのはその知識を小関三英や高野長英あたりから得たかとも考えられる。

道平の模刻の原図は一七九八年アムステルダム刊のエウスタキの医学解剖書のオランダ語版の中の図版であって、テキストをオランダ語で書いた人はアンドレアス・ボンであった。その蘭書は華山の「客座掌記」丁酉（天保八年<sup>8</sup>）の蘭書目録に

千七百九十八年

解体図解 エウキタキユウス ブレンジ著 一冊

と記録しているので華山も閲覧していたと考えられる。ただしブレンジは別人で、次の行にも記載してあるので、誤記と考えられる。一七九八年版のエウスタキの解剖書が舶載されていたことは右記の通り明かで、次の章で当時の江戸の蘭法医学者たちを刺激し、本文を抄訳したり、図版のあるものを引用模写あるいは模刻した状態を述べる。そこで同版が前述した通りのオランダ語の本であることも明かになる。

本岐道平については前述の諸記録の紹介論考された範囲に止まり、それ以外に年代をはっきりさせることはできなかった。ことに彼の銅版画製作は「神経血絡開現図」十点到止まり、それ以外の作品の有無も判らない。しかしその十点が現存することで、安田雷洲と同時代に生きた銅版画作者として充分評価することができる。それは模刻ではあっても中伊三郎の模刻以上に内容上からも技法の点でも原図版を咀嚼して表現している点を評価できると考えるからである。道平の十点の製作は天保の初年頃に行われたものと推考できる。渋川の意見書がでる以前であり、同意見書の上申されたのは天保十年七月であって、鳥居の陰謀による疑獄事件に追隨して行われたものと考えられる。

渋川の意見書の内容のうち取挙げられたものは二項であり、直接絵画銅版画に関するものはない。『新撰洋学年表』の天保十一年五月に長崎奉行へ阿蘭陀差出候風説書には原文を添えよ」とか、「通詞たち掛り以外に他に出させるな」といったことや、同じ月に江戸奉行へ「市中の看板にオランダ文字を使用させるな」といった通達があったことが出ているに過ぎない。かえって天文方で蛮書を翻訳した曆書医書天文書あるいは窮理書の類は其筋だけで取扱い濫に世上に流布しないようにすべきだと、天文台訳員の地位にいた杉田立卿、宇田川榕庵、大槻玄乗、箕作阮甫、杉田成卿の蘭学者、蘭法医たち五人が連署でいっている。

天保十年の「一八三九、江戸」と腐蝕刻字の入った銅版肖像画ヒポクラテス像は石川大浪の同図を模したものであるが、その製版作者は榕庵でも松田玄々堂でもなく、安田雷洲と考えられることを雷洲の他の作品との関連ですでに別稿(『大和文華』七九号)で論考した。

天保十五年(弘化元年)には雷洲は「東海道五十三駅」のシリーズを製

作刊行した。その現存するシリーズを検討した結果、原版に加筆し腐蝕し直したことが二回もあったことが判った。<sup>36</sup> その加筆腐蝕を雷洲自ら行ったのか、雷洲没後あるいは明治の始め銅版画が盛んに行われた頃手が加えられたものかどうかは判然とはしないが、それだけでもはやされたことは確かである。雷洲の銅版画の年記の最も遅いものは安政二年(一八五五)の武江地震である。鳥居や渋川の上司であった老中水野忠邦は天保十四年に辞職し、弘化二年(一八四五)老中を罷免された。江戸において銅版画に対する取締的上申が特に製作者に影響を及ぼした確証は見当たらない。

江戸系銅版画は司馬江漢の創製以後、亜欧堂田善、松原右仲、安田雷洲と続き、さらに本岐道平を加えて江戸期を終え、明治期にかけて梅村翠山が出てくる。翠山は天保十年十一月二十一日生れ、(没年は明治三十九年六月十八日六十八歳)初期の銅版画は文久三年(一八六三)幕末期に「東海道写真鏡之内」と冠した銅版画シリーズも製作したり、引続いて門人たちと合作した「東京名所」と題したシリーズがあり、京都出身の二代目玄々堂松田緑山と行動を共にしたり、多角的に製作活動を明治初期に行っている。

さて本題の本岐道平の「神経血絡開現図」の各図の画像周辺に記入した文字は次の通りである(図番号は『南蛮美術絵目録』による。下のTABとある番号はエウスタキ原本(一七二四年刊初版本)の図版番号を示す。同『目録』の順序を原本の順に置き代えた。□には彩色見本が塗ってある。原書の銅版図版の大きさは縦二八センチ横一八センチ前後である)。

35 神経血絡開現図 Motoki Mitsei Kole wo hol (挿図1・2)

36 脳ノ十対神経並ニ脊椎三十対神経五ニ連リ通行スル大幹ノ図(図版X-a)

TAB.XVIII (挿図c)

第一対神経  第六対神経  脊椎神経

第二対神経  第七対神経  腰椎神経

第三対神経  第八対神経  薦骨神経

第四対神経  第九対神経

第五対神経  第十対神経

第一枝別  項椎神経

第二枝別

第三枝別

37 脳ノ五対神経ノ一枝別項神経脊神経腰神経薦骨神経  
足神経筋肉中ヲ通行スル図(挿図5) TAB.XVIII(挿図6)

五対神経一枝別  腰椎神経  足神経

六対神経  脊神経

項神経  薦骨神経

38 項神経脊神経腰神経足神経筋肉ノ間ニ通行スルヲ露  
ス後面ノ図(挿図7) TAB.XX(挿図8)

項神経  脊神経  足神経

39 項神経脊神経腰神経足神経皮下ニ露ハレ及脳ノ五対  
ノ一枝別顔面ニ露ハル、前面ノ図(挿図9) TAB.XXI(挿図10)

五対ノ一枝別  脊神経  足神経

項神経  腰神経

44 動静二脈皮下ニ露ハル図(挿図11) TAB.XXII(挿図12)

動脈  静脈

40 脳ノ五対神経ノ一枝別項神経脊神経腰神経薦骨神経  
足神経皮下ニ露ハル図(挿図13) TAB.XXIII(挿図14)

五対神経  脊神経  薦骨神経

項神経  腰椎神経  足神経

43 動静二脈筋肉ノ間ニ露ハル、図(挿図15) TAB.XXIV(挿図16)

動脈  静脈

42 心ヨリ全身ニ布延スル動静二脈ノ幹枝ヲ露ハス図(図版X-b) TAB.XXV(挿図4)

動脈  静脈

41 諸臓接続ヲ切断シテ二血脈ノ大幹ヲ露ハス図(挿図17) TAB.XXVI(挿図18)

動脈  静脈

右の内総目録番号の36、39、43の三枚の右側が痛んでいる。ことに39図は右側の三分の一ほどはなくなっている。損傷の原因がどこにあるのか、そのような状態になるまでどのように扱われてなるものか全く考えもつかない。浅草蔵前でエレキテル展示の際いっしょに並べたものかなどと想像もできるが、実際にはどうであったか、銅版画ではあるが各図何枚刷ったかなど判らないことが多い。同表題の装飾図はエウスタキの原本ではなく、他の蘭書から得たと思われる。表題を囲む飾りの枠の上部中央に左手に槍を持ち右手に紋章を描いた小さな盾のようなものを持つ人物が立ち、向って右側には二人の天使、向って左側には四人の天使が描いてある。その中の一人は中央の人物の右肩の上を笛を吹きながら飛んでいる。飾り枠下方に向って右に獅子、

挿図3 エウスタキ原図版 XVIII (図版 X-a 対応)

挿図4 エウスタキ原図版 XXV (図版 X-b 対応)

挿図5 本岐道平 神経血絡開現図  
内臓・手足・筋肉神経分布前面図(37)

挿図11 本岐道平 神経血絡開現図  
皮下血管背面図(44)

挿図15 本岐道平 神経血絡開現図  
動静二脈筋肉ノ間ニ露ハル、背面図(43)

挿図6 エウスタキ原図版 XXIII

挿図12 エウスタキ原図版 XXII

挿図16 エウスタキ原図版 XXIV

挿図7 本岐道平 神経血絡開現図  
全身筋肉神経分布背面図(38)

挿図13 本岐道平 神経血絡開現図  
皮下神経開現全身図(40)

挿図17 本岐道平 神経血絡開現図  
諸臓接続ヲ切断シテ二血脈ノ大幹ヲ露ハス図(41)



挿図9 本岐道平 神経血絡開現図 皮下神経開現前面図(39)

挿図10 エウスタキ原図版 XXI

左側に豹がそれぞれ棹に前肢をかけて立ち上った形に描いてある(挿図1)。  
前述した横文字サインはその下方に刻記してある。(挿図1および2)

## 二、エウスタキ解剖書の蘭語版を引用した

### 江戸期の日本医学解剖書

腐蝕銅版画で人体解剖図を模刻刊行したのは宇田川玄真、榛齋著『医範提綱  
附図』で、文化二年(一八〇五)亜欧堂田善が五二図を製作したのが最も早

本岐道平の銅版画「神経血絡開現図」とエウスタキ解剖書

い。次が斎藤方策、中環共訳の『把爾翁溷解剖図譜』  
上下二編附図二冊が文政五年(一八二二)が出版さ  
れ、中伊三郎が附図四〇枚を一人で模刻製作した。伊  
三郎は引続いて『重訂解体新書』の附図を腐蝕銅版画  
で四十五図を作り直した。文政九年(一八二六)完成  
した。

田善と伊三郎の腐蝕銅版画による人体解剖図模刻と  
の間にハイステル外科書の蘭訳本を伊勢の越村德基が  
訳した『瘍科精選図解』上下二冊本が文政三年(一八二〇)に出たが、その  
中に二枚の模刻銅版画(ハイステル像と「脱疽等不治疾鋸解患部」)を牧墨僊  
が製作挿入している。その本は外科書であり、人体解剖図ではなく肖像画と  
表題通りの外科治療の状況図である。

模刻銅版画ではなく、南小柿寧一(一七八五—一八二〇)の著作で文政二  
年(一八一九)完成した『解剖存真図』の中にエウスタキの人体解剖図版を  
二枚模写して入れてある。『解剖存真図』は内容的に江戸期最高のものと評

価されている。南小柿は淀藩の藩医だったが、四十余回もの解剖に立ち会い、自ら絵筆をとって解剖図を描いた。解剖図は八十三図あるが、自分の経験しなかったところは『施薬院男体図』、『解体新書』や西洋解剖書から図を引用した、といわれているが、その西洋解剖書の中に前述のエウスタキの解剖図も入る。

才十八 神経 ⑩三十対神経及手足神経 とある秋と傍に書いてある人体解剖図は(挿図19)、エウスタキの図版十九図「TABXXVIII」(挿図6)を模写し、

挿図20 南小柿寧一 解剖存真図 第五十二

挿図19 南小柿寧一 解剖存真図 第十八神経

才五十二 心及動静血脈 ⑪動血脈 ⑫静血脈 とある図(挿図20)は同じく図二十五「TABXXV」(挿図4)を模写引用し、両図とも原図にはない彩色を施している。

南小柿寧一はこの解剖図の完成後、大槻玄沢に頼まれて『重訂解体新書』の付図の製作にかかり、木版画で出す下画を描き完成していた。彼は文政三年死去したが、『重訂解体新書』の図版が木版ではなく、銅版画で出版された次才については同書の寧一の文政辛巳(四年)春日と記した識語と、大槻磐水の記した文章によって、中伊三郎が浪華の斎藤方策の推薦を受けて銅版

挿図22 重訂解体新書 第四十五 筋肉図背面

挿図21 重訂解体新書 第四十四 筋肉図前面

挿図24 エウスタキ原図版 XXIX

挿図23 エウスタキ原図版 XXVIII

画で作るようになった事情が判る。同書にはエウスタキの解剖書から引用した図版は(欧)と入れた七枚の図版がある。原図版と模刻銅版画との関係は次の通りである。

重訂解体新書 (欧)

Bartholomaeus Eustachius

TABULA ANATOMICAЕ (1798)

神経全図 (第十六) [TAB.XVIII 上半]

神経全図 一、三、四、五、下、(第十七) [TAB.XVIII 下半]

眼目篇図(眼膜内面図) (第十八) [TAB.XXXX—VI]

豎割腎図 (第三十七) [TAB.XI FigX]

腎、輸尿管、膀胱及精通辜丸導連係(第三十七) [TAB.XII FigI]

筋肉図前面 (第四十四) [TAB.XXVIII]

筋肉図後面 (第四十五) [TAB.XXXIX]

右に示したように原図を二図に分けたり、一枚の図版にいくつか描いてある原図の中から一図だけを模刻した図版があることが判る。第十六、第十七の神経全図は本岐も模刻している。(挿図21・22・23・24)

中伊三郎の模刻銅版画解剖図は前に製作した『把爾翁湮解剖図譜』の附図よりも『重訂解体新書』の解剖図の方が、立体感表現や腐蝕状態がかなり出来がよくなっている。

エウスタキの図版の各部分を訳した稿本がある。翻訳したのは前出した天文方の訳員になった蘭法医でもあった杉田成卿(一八一七—一八五九)で、表題は『解体図指説』とある。それが書き終った期日の記入がないため、何年頃訳したか判らない。全部で十一枚あるが、図版はない。オ一枚目の右上

本岐道平の銅版画「神経血絡開現図」とエウスタキ解剖書

に

解體図指説 欧私荅鳩斯図

和蘭諸斯的爾單、瘍科兼解體科、亜、凡著

日本 江都 杉田信 譯

此図オ一葉ヨリオ八葉ニ至ル者ハ、欧先生著ス所ロノ解體小図中ノ者ニシテ、腎及ヒ血脈諸般ニシテ一様ナラザル者ヲ載ス。皆実験スル所タリト云。今此篇中ニ収載スト云爾

と原書を明確に示している。オランダ・アムステルダム刊行であることは判るが、刊行年は書いてない。亜、凡著とあるのは、A. Bonnを漢字で宛たものであり、その前の瘍科兼解體科とあるのは外科兼解剖学の意。ただしポンは著者ではなくオランダ語に本文を訳した人である。そのオランダ語版は前出した華山の「客坐掌記」丁酉の蘭書目録に記載された「千七百九十八年版の解體図解 エウキタキウス著」とある書と同一の版である。

成卿の抄訳した内容と原蘭書との関係は次のようなものである。

オ一葉 オ一葉からオ四葉まで(右、左ノ腎について) オ一図〜オ三図

TABULA PRIMA

オ二葉 同 右 TABULA SECVNDA

オ三葉 同 右 " TERTIA

オ四葉 同 右 " QVARTA

以上一枚目を四段に

オ五葉(腎ト輸尿管ヲ縦割ス)オ一図 オ二図 TABULA QVINTA

オ六葉(狗の腎について) 同 右 " SEXTA

オ七葉(狗腎) オ一図〜オ三図 " SEPTIMA

オ八葉 オ一図〜オ六図 " OCTAVA

(狗腎) 才一図、才六図(才三、才四図、猴ノ腎) 以上二枚目  
 才九図 男像開頭蓋及胸腹者 TAB.IX  
 以上才三枚目

才十板 一図食道及胃・前面  
 二図腹内諸臓、五図 } 以降各図一枚毎になる  
 TAB.X

才十一板 (内臓各部について) 才一図、才十一図 TAB.XI  
 才十二葉 (腎、副腎その他について) 才一図、才十一図 TAB.XII  
 才十三葉 (右、左・腎について) TAB.XIII

才十四葉 (腸部諸器関について) 才一図、才十図 TAB.XIII  
 才十五図 (胸部腔内部について) 才一図、才六図 TAB.XV  
 才十六板 (心臓について) 才一図、才六図 TAB.XVI

才廿八葉 (人体、筋について) TAB.XXVIII  
 才廿八葉の図版は『重訂解体新書』の才四十四の(欧)才二十八図とある正面  
 向きの人体図(挿図21)と同じ。図版の各部分の名称や、状況を説明した本  
 文を訳したものである。

本岐道平の「神経血絡開現図」で模刻した原図で他書と共通なものは、  
 『重訂解体新書』の才四十五(欧)才二十九図とある背面を描いた図(挿図22)  
 と、南小柿寧一の『解剖存真図』中に引用した才十八と才五十二の人体解剖  
 図(挿図19・20)の計三図版である。道平は原図を丁寧に模刻して、線  
 の太さを使い分け、立体感を出すために陰影部分を細いきれいな腐蝕線を使  
 って巧みに描き出すことに成功している。その点では刊本で出版された医学  
 解剖書の附図に課せられた画面の大きさの制約がないためか、それまでの人  
 体解剖図の銅版模刻よりは優れている。また彩色されているので、麻田剛立

(一七三三—九九)が動脈を白脈、静脈を紫脈とし、それらが細かく分れて全  
 身にゆきわたる様子を「モシ明眼ノ人奇妙ノ術アリテ尽ク見テ図セバ人ノ質  
 ハ紫白マダラノ絲瓜ナルベシ」と表現したものを、正に具体的に造り出した  
 といえる。

エウスタキのオランダ語の解剖書一七九八年刊本は十九世紀前半に以上の  
 ように日本で引用されたことは明かだが、『江戸幕府旧蔵蘭書総目録』など  
 には記載がなく、今日の日本には何処にも所蔵している処はない。

### 三、エウスタキの解剖書

バルトロメオ・エウスタキの名が日本に知られたのは、西洋医学解剖書の  
 翻訳書である『解体新書』(安永三年(一七七四)刊)巻の一解体大意篇才一  
 のその三「すべからく古今の解体の書を熟読すべき」として三十一人の名  
 を挙げてあるが、その中の八番目に欧私太幾都私と出されて以降のことと考  
 えられる。次の巻の二耳篇才十「円窓、蝸牛殻に通ず。この竅もまた、膜あ  
 り。欧私太幾都私(古人名)喇叭は骨管なり。……これに向う者は三つの半  
 規管なり(後略)」。以上の蝸牛殻、三つの半規管の語は、日本の文献に出た  
 最初であり、訳語として傑作といわれている。

同書の始めの凡例に、訳に三等あり、として翻訳、義訳、直訳を挙げた。  
 その訳し方によってオランダ語が日本の言葉になり、数々の傑作が生まれ  
 た。神経もその一つである。道平も表題として刻字した。今や医学専門用語  
 ではなく、一般用語として使われている。

エウスタキについては彼の解剖学上の業績として耳管—欧氏管の名が残  
 り、一五五二年世界で最初の銅版解剖図譜 Tabulae anatomicae を作った十  
 六世紀の偉大な解剖学者の一人として知られている。しかしその図譜は一七

一四年に最初の版が刊行された。製作から一六〇余年後である。初版が刊行されると、医学史上の最大の重要な記録として認識されてきた。その感動的な再発見と最初の出版、そして十八世紀のヨーロッパでは各種の版が刊行された。その中に既述した十九世紀前半の日本に影響を及ぼしたオランダ語版も含まれる。

バルトロメオ・エウスタキ *Bartholomeo Eustachi* (*Euschio* の形もたま時折使われる) の伝記は部分的に知られているに過ぎない。生年は一五〇〇年頃、アンコーナ *Ancona* の近傍のサン・セベリノ *ルケ San Severino Marche* で生まれ、一五七四年死去。没年には同時代人の証言がある。彼の父も医者で *マリアノ Mariano Eustachi* といった。バルトロメオはよい人道主義的な環境で育てられ、ギリシヤ語、ラテン語、アラビア語が使えた。一五三九年の末には物理学者でもあった。一五四七年ウルビノで科学諸分野の学者たちの集まる御前会議に招待された時は解剖の確かな順序を成就していた。また数学を学んだり、開業医としてローマにいた数年間にローマ大学にも出ていた記録がある。一五六三年の公立文書館のカタログに医学の主題と年俸が *メイチナ プラチカ Medicina pratica* 年俸三三〇スクード *Scudi* と記載されている。

エウスタキの解剖学での獨創性は同時代のレオナルドダヴィンチ(一四五二—一五一九)やヴェサリウス(一五一四—一五六四)が持っているのと同じ優秀さと多くの発見を備えていた。十六世紀は医学にもルネッサンスの効果が濃く表われたが、その大革新の火ぶたを切ったのは解剖学のヴェサリウスといわれる。一五三七年に解剖学と外科の教授となり、その翌年学生用の『六枚つづきの解剖図』、一五四三年主著『人体の構造に関する七ツの本(略称フアブリカ)』をバーゼルで刊行した。

本岐道平の銅版画「神経血絡開現図」とエウスタキ解剖書

ヴェサリウスが解剖学の建設者であり、その業績も多いことはエウスタキも認めていた。しかしフアブリカの本文や挿画に関して正確でないものも含まれていることをエウスタキは激しく批判した。「いかりの人」とも云われたヴェサリウスを奔放で厚ましい礼儀知らず、と見做していたエウスタキはヴェサリウスを決して名前では呼ばず *This man* という呼び方をした。同時代のもう一人の優れた解剖学者 *ファロピオ Gabriele Fallopio* (1523-1562) に対してエウスタキは批判をもっていたが、異なる対応をしていた。一方 *ファロピオ* はヴェサリウスに敬意を以て対し、決して批判はしなかった。

エウスタキは生存中に四編からなる論文集を一五六四年ヴェネチアで刊行した。そのオ一集の中に一〇×一六・三センチの縦長の矩形の図版八枚をエッチングで入れた。後に出た *Tabulae anatomicae* の始めに入っているものはそれと同じものである。一五七四年には、古人 *ヒポクラテス* の書いた章節をラテン語に翻訳、注を加えた著述を完成出版した。それは八〇年後の一六五三年に重版された。

前述の八枚のエッチングの下面を描き、腐蝕したのはエウスタキの助手であり、心から彼の支持者であった *ピニ Pier Matteo Pini* であった。同じ仕事の中でエウスタキの四十六枚の図版が *ピニ* によって寄せられ、彼は著作にこれらの図版を使うつもりだった。しかし彼の計画は生存中に実行できなかった。その著作の内容がヴェサリウス、*ファロピオ* その他科学上の対立的敵手に対する基礎的な批評から成っているためではないか、と推察されている。

エウスタキはヴェサリウスの死去した一五六四年頃は極めて不安定な健康状態だった。一五六一年の終りまでには大学を退き、教師としての活動をすでにやめていた。しかし彼が死んだのはウルビノ枢機卿 *デラ・ロベレー* の治

療に赴くための旅行の途中であった。彼の死が一五七四年であったことは遺産相続の記録にも明示されている。

エウスタキの科学上の財産相続人は前述したウルビノ生れのピニで、その他の遺産は息子のフェルナンド（フェランテともいわれる）が相続した。ピニが相続したのは彼の著書、他の人の記録、諸国語の書籍、絵画、スケッチ、銅版、金属製や木製の数学の道具、ガラス製の蒸溜装置や導管、ウルビノ伯から贈られた時計であった。記録の中で今日のわれわれが注目するのは当時の解剖用道具の骨用鋸、ナイフ、なた、数学の道具、蒸溜分離装置等の多くの部分から構成される道具類である。ピニに託された銅原版群は十七世紀までは保存されていた。エウスタキの意志で原版群をピニに遺したのは一五七〇年だった。ピニには跡取りがいなかった。彼の未亡人がウルビノ在住

の他の家族に渡っていた。

以上の経緯をたどってエウスタキの原版群を発見し、説明をつけて一七一四年ローマで刊行したのはローマの医学者、解剖学者のランチスイ Giovanni Maria Lancisi (1654-1720) であった。一六七六年以後精神病院で活躍、一六八四年ローマ大学で解剖学教授、同時に法王イノセント十一世（一六七六一一六八九）の正規の内科医に指名され、さらに続く二代の法王の下でローマ教皇庁の首席侍医の称号を死ぬまで与えられていた。

ランチスイの専門は脳と心臓の病気だったが、衛生問題や家庭のペットとすべての伝染性の病気にも関心を持っていた。彼はそれらの関心を実践するため全財産を病院の建設に遺贈しようとした。彼の財産の中には若い助手時代から親しんでいた医学の古典の貴重な蔵書があった。エウスタキの原版に

挿図25 エウスタキ原版  
TABULA QUINTA

挿図26 エウスタキ原版  
TABULA SEXTA

挿図27 アルビニ版 TABULA QUINTA, TABULA SEXTA

関心を寄せたのは歴史の見地からエウスタキの人体に関する組織上の探究を知るためだった。ランチスイを大いに触発したのは一六九四年までイノセント十二世（一六九一—一七〇〇）の正規の医者だった、つまり同僚でもあったマルピギ *Marcello Malpighi* (1628-94) だった。マルピギは顕微鏡解剖の立役者であったが、エウスタキの正確な器管解剖を証明する彼の図版を見つけていた。マルピギはエウスタキの小さな組立の解明は（腺、肺、脾、神経、脳）感覚上の諸器管の構造に関する研究の結果として彼の図版にある、と認識していた。そのマルピギの意見は一七一四年版にある。

法皇クレメント十一世（一七〇〇—一七二一）は一六四九年のウルビノ生れだが、ランチスイのエウスタキの原版発見と出版の意義を認め、原版捜索に力添えし、買取りを自ら行い、ランチスイに与えた。ランチスイは出版にあたって、協力を得た人たちそれぞれの言葉を巻頭に載せることで感謝を表している。

遺産の中から前述した銅版より大きな版板（一八・四×二八・二センチ）三八枚以上を発見した。しかし原版に関する手書きの記録は見つからなかつ

挿図28(a) アルビニ版 XXVI

た。エウスタキの所説ではほぼ四十六枚図版があったという。ランチスイは

原版の両面に腐蝕図版があることを指摘し、挿画は四十七枚入れた。エウスタキの解剖図譜の順序は八枚の小さな図版を前奏曲、大きな図判の才九図を出発点と見做すと、ヴェサリウスの『ファブリカ』と順序は逆になる。しかし図版の並べ方はランチスイの指示による、と思われる。字形から推察すると、大きな版に使った字形と小さな版の字形が著しく異なることからエウスタキは彼の解剖書には小さな方の図版は使うつもりはなかったと仮定することもできる。しかし、八枚の原版がすでに失われていたことは科学史上の悲しむべき損失だと推論できる。杉田成卿は『解体図指説』でその八図版の説明を訳している。

ヴェサリウスの『ファブリカ』の木版図の解剖人体の各図は仰々しく生々しい姿勢をとらせた図像が多い。しかもそうした図像はヨーロッパのそれより後の解剖書の挿画の手本になった。その一つが『解体新書』の隔膜篇図の「示隔膜附続」に模写されている。エウスタキの銅版図版はその人体表現には節度というか、ある抑制が見られるのが著しい特徴といえる。その図像は

挿図28(b) アルビニ版 XXVI No. I

挿図28(c) アルビニ版 XXVI No. II

数学上の物差しにかこまれて、ほとんどシュールリアリズム的效果を持ち、しかも独特な透視画法的現象によって強められている。物差のかこみの抽象性は台板上の人体図を熟視の対象にする。ヴェサリウスは一つの解剖(検死)の結果をとらえ、エウスタキの図版は無数の検死の結果を包括的な広い展望で示したものと、といわれる。

エウスタキの解剖書の銅版原画のほとんどすべての下画はエウスタキによって描かれたものと彼の助手ピニの描いた図がある。ピニは最初の八枚を彫版し、その余も彫版したと宣言している。その宣言を疑う理由もない。ローマのジュリオ・デ・ムジが彫版したとも云われるが、ムジは単なる彫版師として関与したかも知れない。ピニは解剖学挿画を学園で教えられ、活躍したことは間違いない。解剖図版をかこむ物差の表示はエウスタキがウルビノ時代に考案したものだが、当時地図製作の分野を支配していた方法である。エウスタキは彼の図版に用いる物差を自ら製図した。その使い方は図像のある個所を素早くさがし、その部分の説明を読むことにあった。ランチスイの初版ローマ版の編集もその図版に従った。

しかしドイツ生れのオランダ人アルビニ Bernard Siegfried Arhini (1690-1770) が一七四四年に出版したエウスタキの解剖書には初版に使った原図版を出し、それに並べたり、その図版の後に物差を使わず、図版の各部分部分にアルファベットの太文字小文字、数字、ギリシヤ文字を入れて説明文と関連させた彼の新しい工夫による図版を加えた(挿図25・26・27)。当然初版本より図版ページが増え(挿図28)、本文ページも一五一ページから二七七ページに増えている。この本は野間科学医学研究資料館に入っている。一七九八年のオランダ語版はこれを訳したと思われる。一七九四年初版本から一八〇〇年のドイツ語版まで十種出版された。それらの内正確な表題が不明

の版もあるが、列記した。

- 1) 1714 <LANCISI (Giovanni Maria)> Tabulae anatomicae....., Rome fol.
- 2) 1722 " " fol.
- 3) 1728 <J. M. LANCISI> " " fol.
- 4) 1744 <Bern. Sieg. Albini> Explicata Tabularum anatomicarum Bartholomaei Eustachii Leiden
- 5) 1758 A compleat System of the Blood-vessels and Nerves, taken from albinus's edition of Eustachius.....Engraved on large copper plates with tables of explanation.....translated into English, etc. John Knapton. London, fol.
- 6) 1761 <B. S. Albini> Explicatio Tabularum Anatomicarum [With the tables themselves, and the explanatory text of B. E. to tables 1-8] Leyden, fol.
- 7) 1769 <G. M. Lancisi> , Venice.
- 8) 1783 , Rome.
- 9) 1798 <A. Bonn> ontleedkundige platen, met eene verklaring derzelve, 7 bundels, in 47 platen, folio, Amsterdam, L van Es. (translated from A. Bonn), J. C. Krauss
- 10) 1800

註

- (1) 告発状、探索復命書 佐藤昌介著『洋学史研究序説』(岩波書店一九六四年刊) 三九五、三九九ページ
- (2) 『天保雜記』オ二十八冊 三一七ページ、『通信協会雑誌』五六号 大正二年一月・一〇一ページ
- (3) 『華山全集』オ二卷、一〇八一―一二四ページの内一二二ページ参照。



- (4) 同右 一五七—九〇ページ
- (5) 『ありやなしや』吉見鉄吉編 明治四十年刊活字本五三—七九ページ、『森銃三著作集』オ六卷「渡辺華山」の章の内蜜社の獄の項参照。
- (6) ドンドルヒュスは *Donderbus* 火器の名称。一八五一年の蘭英辞書では英語で *blunderbuss*。告発状のドンドル、華山の口書ではドルールヒュスとあるが同じものをさす。喇叭(らっぱ)銃と訳した蘭和大辞典(昭和十八年刊)がある。
- (7) 前掲註2雑誌に如電は三筋町の北六十五六番地とある。現在では元浅草三丁目の南西隅か。
- (8) 前掲註3三三三ページ参照。
- (9) 拙著『日本銅版画の研究 近世』美術出版社、昭和四九年刊、三四九—三六二ページ、三五二—三五三ページ、『江戸の銅版画』新潮社、昭和五八年七月刊、二一四—二一五ページ参照。
- (10) 伝記、ランチスイ、彼の原版探索等の記述は一七二四年版の複製本に付けられた別冊の introduction (記述者名はなし) に主としてよった。複製版は *Württembergische Landesbibliothek Stuttgart* 所蔵本から製作された。
- (11) エウスタキは解剖に関するより大きな著作に予定していたタイトルは *De dissenibus ac controversis anatomicis*。